



北村遊水地事業の河道掘削工事の現場代理人を務めている永井さん

近年、自然災害が多発しています。防災や減災の観点から、治水や砂防などの重要性を改めて実感している人も多いのではないのでしょうか。

平成24年度に始まった北村遊水地事業は、北海道の母なる川・石狩川の下流域に住む人々を水害から守るため、10年以上の歳月をかけて取り組む大プロジェクト。これまで多くの石狩川河川改修工事に携わり、今年度から北村遊水地事業の工事担当になった(株)田端本堂カンパニーの永井幸生さんに会いに行ってきました。

社会に貢献できていることの実感とプライド

永井さんが勤務する田端本堂カンパニーは、滝川市の田端建設(株)と三笠市の(株)本堂建設工業が合併して平成16年に誕生しました。平成26年に田端建設の創業から数えて創業100周年を迎えた老舗の建設会社です。大学で経営学を学んだ永井さんは3年ほどの銀行勤めを経て、父親が経営する建設会社に転職。平成14年に本堂建設工業に入社し、石狩川水系の河川改修工事を多く担当してきました。

中でも印象深いのは、4年前に担当した雨竜川支流の大鳳川おおほうの水防拠点基盤整備工事。「きれいに仕上がった工事でした」と完成後の写真を見て満足そうです。ところが、翌年に担当した工事は大変な苦労がありました。空知川の河岸を保護する工事でしたが、転石があって、土砂が崩れないようにする矢板が打てず、ドリルで石を砕く作業が追加になるなど「一難去ってまた一難、そんな大変な工事でした」と笑います。「でも、ものづくりは楽しい。どんなに苦労しても完成するとやってよかったと思えます」と永井さん。「道央圏連絡道路や北村遊水地など、大きなプロジェクトに参加できることもこの仕事の魅力。特に、北村遊水地事業は社会に貢献できることを実感できます。若いころは気付かなかったのですが、治水事業の大切さを改めて感じています。石狩川下流域の市街地や農地を浸水被害から守るといふ、この工事の大きな意義を感じるとともに、強い責任感と仕事に対するプライドを持っています」と、現場を任された重みを噛み締めています。



たつぷ大橋が見える現場



掘削した土砂を運ぶための仮道路

北海道の未来を守る、北村遊水地事業

北村遊水地事業は昭和56年8月上旬の豪雨の経験を教訓に、戦後最大規模の降雨があっても川の水を遊水地に流し石狩川の水位を下げることで、下流域を浸水被害から守るために計画されました。石狩川左岸の岩見沢市北村地区を中心に、新篠津村、月形町の950haを取り囲むように堤を作り、大雨で石狩川の水位が上がったときに川の水を一時的に貯めておけるようにします。北村遊水地の特徴は、普段は農地として利用されることで、そのために地役権が設定されます。地役権とは、土地は農家等が所有しながら、大洪水が発生したときには浸水した水を貯めておくことができる権利を国が設定するものです。一つの土地を農業生産と非常時の洪水対策という二つの目的に使う、営農者と河川管理者が共存する仕組みと言えます。

永井さんが担当しているのは、北村下流築堤河道掘削工事。石狩川左岸の河道を掘削して河道を広げていますが、掘った土砂を築堤用の盛土に活用できるように確保することも担っています。「北村遊水地事業では、官民が一体となって地域に溶け込んでいく使命と責任があります。今年度この事業には21社が関わっていますが、みんなが事業を成功させようという本気度が伝わってきます」と言います。

また、多くの建設会社やコンサルタントが関わる息の長い事業であることから、業者間で情報共有や密接な連携を図りながら経験を引き継いでいこうと、平成27年に北村遊水地事業連絡協議会を立ち上げ、永井さんは今年度の会長を務めています。「他社の安全パトロールなど勉強になることも多く、技術の向上にもつながっています」と関係者と連携しながら、取り組んでいます。

協議会では工事に関わる情報交換だけでなく、地元のイベントにも積極的に参加しています。7月に開催された「いわみざわ彩花祭り」では観光踊りパレード

に参加。約150人が集結し、審査員特別賞を受賞しました。「イベントに参加すると発注者の岩見沢河川事務所（国土交通省北海道開発局札幌開発建設部）の皆さんとゆっくり話をする機会にもなって、コミュニケーションが深まる有意義な時間です」と永井さん。「協議会で頻繁に連絡を取るのだから、河川事務所の皆さんはもちろん、みんなが一体になっています。相談もできるし、話を聞いていただくときも一つのグループにいるような感じでした。歴史を引き継いで、この事業を成功させたい」と北村遊水地事業への思いを語ります。

変わってきた建設業を知ってほしい

「若い子には、スカイツリーは建築の仕事だけど、ベイブリッジは土木の仕事だと話しています」と永井さん。土木の現場は、いまだにスコップで穴を掘っているイメージがあると、とても残念そうです。「知らない人は、土木の技術者はこれほどパソコンのスキルがあると思っていないでしょうね。エクセルやキヤドを駆使しますし、新しい技術や機械も積極的に導入しています」。北村遊水地の工事でも建設機械メーカーと提携して、ダンプの運行や土砂の積載量をスマホで確認できるほか、簡単に管理できる新技術のデモンストレーションを行っています。

「うちの現場は週休2日制で、現場や事務所もきれいで清潔です。安全靴もブランド物にするなど、建設業は急速に変わってきています。誤解されている建設業、土木のイメージを変えていきたい。そのためには情報発信が大切」と、『北村遊水地工事日誌』と題してフェイスブックも立ち上げました。

「建設業の本当の仕事の様子を多くの人に知ってほしいですね。週休2日になったので、私の生活も豊かになりました」と休日はロードバイクやトレイルランを楽しんでいるそうです。そんなリフレッシュする時間が、仕事の意欲を一層掻き立てているようです。